

## 「月刊 事業構想」社長インタビュー掲載のお知らせ



2023年2月7日

2月1日発売の雑誌「月刊 事業構想」の3月号に、当社代表取締役社長・小幡学のインタビュー記事が掲載されました。

「トップの哲学と発・着・想」シリーズの中で、「脱炭素社会への企業戦略 『種播き精神』で絶えず新たな価値を創造」と題し、CO<sub>2</sub> 排出量削減に向けた当社の取り組みや今後の成長ビジョンなどについて述べております。

記事本文は次ページにてご覧いただけます。

### ※月刊 事業構想について

「企業活性」「イノベーション」「地方創生」をテーマとし、雑誌とオンラインで展開するメディアです。毎号、社会と連動した最先端の特集を組み、新事業を起こす経営者、新たなアイデアで新分野を切り開く若手起業家など、多彩な取材を行っているのが特徴です。

▽Web サイト : <https://www.projectdesign.jp/>

道路の舗装材料で国内トップシェアのニチレキ

# 「種播き精神」で絶えず新たな価値を創造

道路舗装に使われるアスファルト乳剤や改質アスファルトなどで国内トップシェアを誇るニチレキ。同社は二酸化炭素排出削減を可能にする特殊改質アスファルトの開発や、道路点検のDX、環境配慮型の生産・物流基地の設置などの取り組みを通じて、脱炭素社会の実現や持続可能な成長を目指している。

## アスファルト乳剤を主力に数々の舗装材料を開発

ニチレキの創業者である池田英一氏は、1943年にアスファルトを用いた建築防水工事を行う日本瀝青化学工業所を興し、1949年に会社を設立。その後は日本の経済成長の中で必要となる道路網の整備に向け、独自に開発した「アスファルト乳剤」など舗装材料を中心に数々の製品を提供してきた。

「アスファルト乳剤は水の中にアスファルトを点在させて乳化させることで、加熱しなくても常温で扱えるようにした舗装材です。これによって、それまで加熱工事が一般的だったアスファルト舗装をより簡便に行えるようになり、戦後は砂利道がどんどん舗装に切り替わっていきました。そうして道路網の整備が進むにつれ、道路の維持も課題になりました。私たちは早くからそこに注目して補修用のニッチな製品を次々と生み出し、それらの使用方法を研究してきました」とニチレキ代表の小幡学氏は語る。

高度経済成長期に自動車交通が急成長し、交通事故が増加する「交通戦争」とも呼ばれる状況の中、ニチレキではアスファルトにゴムや樹脂等の様々な



左/アスファルト乳剤の散布の状況



右/改質アスファルトによる排水性舗装が施工された道路(右)と一般舗装の道路(左)。一見してわかるほど、排水性の違いは歴然としている

改質材を添加し、性能を高めて丈夫にした「改質アスファルト」の開発に成功した。

「従来のアスファルト舗装は夏場に高温になると軟らかくなり、『わだち掘れ』と呼ばれるへこみができて危険なほか、水はねもひどい状況でした。この問題を解決した当社の改質アスファルトはその後、全国でスタンダードになりました。また、改質アスファルトによって道路路面の排水や騒音も改善しました。特に排水の改善により、平成の初め頃には高速道路の事故は従来から85%程度減りました」

そのほかにもニチレキは、舗装に関する様々な製品ラインナップを有する。

「私たちが得意としてきたものの1つに橋の防水があります。これからもコンクリート床版(しょうばん)などを保護する様々な防水製品・工法の開

発を通して、道路構造物の延命化に貢献してまいります」

## 舗装を長寿命化し、CO<sub>2</sub>を削減する「足すテナビリティ」

ニチレキグループの基本理念は「種播き精神」で、「種を播き、水をやり、花を咲かせて実らせる」というものだ。これは、たゆまぬ努力の積み重ねによって、絶えず新しい価値を創造していくことを意味している。

「『種播き精神』は、創業者の池田英一が最初に謳った言葉です。自分たちで常に考え、お客さまや道路を使う方々の気持ちになって開発し、市場を創って皆さまに受け入れていただくよう努めています。さらに、改善しながらそれを愚直に続けていくという哲学です」

近年、同社事業においては、脱炭素

の取り組みにも注力している。

「改質アスファルト混合物は全国の舗装工事で使われていますが、180℃程度の高温で製造するので多くの燃料が必要になり、CO<sub>2</sub>排出量もかなり多いのが実状です。そこで当社は、混合物の製造温度の低減を試みました」

その結果、新たに開発した特殊改質アスファルトが「スーパーシナヤカファルト」である。アスファルト混合物製造時に必要となる温度を従来製品の180℃から130℃に50℃低減することで、製造時のCO<sub>2</sub>排出量を約22%削減できるようになった。さらに、「スーパーシナヤカファルト」による舗装は従来と比べ約2倍の長寿命化を実現し、工事回数を約2分の1に低減できるため、工事作業や交通渋滞などに伴うCO<sub>2</sub>発生量の削減にも貢献できる。新たな価値を「プラス」して、サステナビリティにつなげるこうした取り組みを、ニチレキでは「足すテナビリティ」と名付けている。

「公共工事では従来、長寿命でライフサイクルコストが安くなる製品でも、イニシャルコストが高ければ採用されませんでした。しかし、近年はニーズが変化し、当社の長寿命化の技術が活かせるようになってきました。国が進める『国土強靱化』も、追い風です」

一方、近年はコロナ禍でデジタル化が加速する中、ニチレキでもICTや

## 小幡学

(おばた まなぶ)  
ニチレキ 代表取締役社長

1956年東京都生まれ。1982年日本大学理工学部卒業、ニチレキ入社。2005年執行役員、2011年上席執行役員、2013年取締役常務執行役員を経て、2015年代表取締役社長に就任。



IoT、AI技術の活用を推進。そして、デジタルを駆使したインフラの安全・安心な管理の実現に向けて「道路点検のDX」にも取り組んでいる。

## 持続的成長を支える人材の開発と育成も推進

現在、同社が取り組む2021年度を初年度とする5か年の中期経営計画「しなやか2025」では、重点施策の1つとして「持続的な成長を支える人材の開発と育成」の推進を掲げている。

「ニチレキのコアは研究開発で、社員の10%程度が研究所で研究開発に従事しています。研究所では、若い人たちが実際にアスファルトに触りながら開発に励んでおり、そのシステム自体が教育の1つだと思っています。博士号の取得も、会社で費用を出して奨励しています。また、全国99か所に拠点があり、技術系の社員も各地域のお客さまの要望に耳を傾けています。これも、重要な社員教育です」

2022年4月には基本給を引き上げたほか、定年を65歳に延長し、それ以降も働きたいという社員には70歳まで再雇用を認めることにした。また、「女性や外国人社員を今後はさらに増やし、社内の多様性を高めていきたい」という。

今後の同社の展望として、小幡氏は新たな生産・物流基地の建設と、海外事業の拡大を挙げる。

「現在、茨城県つくばみらい市に環境配慮型の約11万㎡の生産・物流基地『つくばビッグシップ』を造り、脱炭素への取り組みを加速させる計画を進めています。また、現在は中国が中心となっている海外事業は今後、ほかの国や地域でも強化していく方針です。私たちが日本で培ってきた補修技術は将来的に、途上国でも必要になるはず。中長期的にはその技術を活かして、海外での事業を拡げていきたいと構想しています」



左/アスファルト混合物製造時に必要となる温度を従来品の180℃から130℃に低減することで、CO<sub>2</sub>排出量削減と長寿命化を実現した「スーパーシナヤカファルト」



中/スマートフォンによる道路点検システムの開発など、道路点検DXにも注力



右/社員たちが日々研究開発に励んでいる技術研究所